微たるものと爲れりと。燃料は薪にして之を赤金に仰ぎ、其類を松楊柳とす。

地形は北方の黑山脈回々堡の西方に及んで盡き、更に其西方より一山突起し、西方赤金峽の西に走る。南山は依然又西に延び、赤金堡にて北山に接近し、北に一支脈を出して西南に逸し、支脈は赤金峽の東側に到りて終れり。故に本日の行程は概ね波狀地を成し平坦地稀なりき。

孤城遙望玉門關

十四日午後一時五十分赤金峽を發し、三十里井子、東梁（トンリヤン）を經て行程十三里弱玉門（ユイメン）關（コワン）に達す。城の內外人家千有餘戶、官衙には縣、捕廳、游擊、都司の四衙門を有し、學校は小學堂二個、學生幷に五十餘名を收め、宗教は佛教のみにて、十餘名の僧侶ありと。軍隊は步隊百餘名、試に其一兵卒を招きて職掌を問へば曰く唯〻往來の高官送迎を事とするのみと。人情は其何故なるかを審にせずと雖も、頗る冷酷なるに似たり。地形は赤金峽西方二千米突の處に於て北山盡き、獨り南山のみ稍〻南方に偏しつゝ西走す。其間赤金峽の西方一里餘は、沙丘連綿、高低一樣ならざるが、一たび此處を過ぐれば、開濶なる緩波狀の砂礫平野を以て所謂玉門關に到る。

玉門關の懷古

玉門（ユイメン）關（コワン）は秦、漢、唐以來、中外の邊境にして、詞客の口に上る者少なからず。唐の王